

ドッジボール

2005(平成17)年1月26日鑑賞(東宝試写室)



監督・脚本＝ローソン・マーシャル・サーバー／出演＝ベン・スティラー／ヴィンス・ヴォーン／クリスティーン・テイラー／リップ・トーン (20世紀フォックス映画配給／2004年アメリカ映画／93分)

……小学生の頃にやった日本式ドッジボールに比べると、かなり野蛮な(?) アメリカン・ドッジボールをテーマとした、楽しいスポーツ・エンターテインメント映画。善玉と悪玉のフィットネスジムの経営者同士の対決という図式が面白い。紅一点の弁護士も当初は頭脳で勝負だったが、途中からはチームの一員となって「体力勝負」に切り換え。肥満対策に不可欠なフィットネスジムの奪い合いとドッジボールの勝負の行方は……？

アメリカン・ドッジボールとは？

パンフレットにはアメリカン・ドッジボールのルールが詳しく書かれているが、別にそれを全部覚えなくても大丈夫。なぜなら、映画の中で展開される試合を見ていたら主なルールは大体わかるうえ、どうせ〇〇チームが勝つに決まっているのだから……？ ただ、①自分のもっているボールで相手が投げてきたボールをカットできることや、②投げたノーバウンドのボールを相手に受けとめられたら、投げた方がアウトになり、しかも退場していたチームメイトがひとり復帰できる、などはルールを読まないとわからないはず。なお、ルールでは「頭は狙わない」と書いてあったが、映画の中ではかなりそれは無視されていたよう……？

精神論の多い名コーチ……？

寄せ集めの「アベレージ・ジョー」チームのコーチ役を買って出たのがパッチーズ (リップ・トーン) という車イスの老人。何と彼は、全米ドッジボール協会

のオールスターに7度も選ばれた名選手。パッチーズが徹底させるのは、ドッジボールの「5つの基本」、①ドッジ DODGE (かわす)、②ダック DUCK (かがむ)、③ディップ DIP (つつこむ)、④ダイブ DIVE (飛ぶ)、そして⑤もう一度ドッジ DODGE (かわす)だ。しかしその実際のコーチぶりは、かつて日本の女子バレーを世界一に導いた「鬼の大松」と呼ばれた故大松博文監督と同じような徹底したスパルタ方式。というより、無茶苦茶な「しごき」に近いもの。さらにアメリカ人のクセに(?)、エラく精神論も多い。とりわけチームが危機的状况に陥った時に言う「怒れ、プレーをする時にはワルになれ！」という言葉を聞くと、あまり優秀なコーチとは思えないが……? まあ映画だからいいか……?

アメリカ社会と体調(体重?)管理

高カロリー食文化(?)、そして肥満社会(?)だが、他方で、競争社会であり自己責任主義のアメリカでは、「肥満」はそれだけで社会的評価を落としてしまう要因となる。もっとも、第1期ブッシュ政権の中枢を担っていたアーミテージ国務副長官はかなりの肥満体だったはずだが、あれは肥満とは言わず、「巨漢」と言うのだろうか……? それはともかく、そんなアメリカでは体調(体重?)の自己管理の重要性が徹底しており、クリントン前大統領もブッシュ大統領もジョギングを欠かさないとのことだ。宴会三昧で肥満気味の日本の政治家たちもこれを見習わなければ……。

フィットネスジムの必要性

こんなアメリカ社会ではフィットネスジムが不可欠。日本でも最近ではフィットネスの必要性・重要性が認識され、都心部では大手を中心とするたくさんのジムがある。また高級(?)ホテルには、フィットネスクラブがあるのが常識で、外国人宿泊客はビジターとして早朝からここで泳いだり走ったりしている。ちなみに女優吉永小百合も某ホテルのフィットネスクラブのプールでよく泳いでいるとのこと。かくいう私も、日曜日ごとにジム内で15~20kmを走ることは欠かすことのできない習慣となっている。この映画は、このようにアメリカ社会に不可欠とされているフィットネスジムの経営者の「対決」をアメリカン・ドッジボール

を通して描く面白いもの。ドッジボールの試合もいいが、2人の経営者の対照的なパーソナリティが実に面白い。

2人のフィットネスジムの経営者

映画の冒頭、ハデハデしい演出で過剰なまでに人間の危機意識に訴えてフィットネスの重要性をアピールするのがホワイト・グッドマン（ベン・スティラー）。彼は最新鋭の「グロボ・ジム」の経営者で、拡大路線をひたすら突っ走っている。かつて肥満だった自分自身の体験からフィットネスの必要性を認識しているだけに、その説明に説得力はあるのだが、何せそのアピールの仕方があまりにもコマシャリズムに乗りすぎとなっているため、ちょっとうんざり……。

他方、このグロボ・ジムの前にある「アベレージ・ジョー」を経営するのがピーター・ラ・フルール（ヴィンス・ヴォーン）。こちらは金儲けは全く念頭になく、会員の親睦を大切にしている経営者。しかし、ホワイトに言わせるとそんなピーターの考えは古く、自然淘汰されていくべきものに映っている。現にアベレージ・ジョーの経営は苦しく、ピーターは今日も借金の督促を受ける始末。そして遂に銀行から派遣されてきた弁護士から「30日以内に5万ドルを支払わないとアベレージ・ジョーは、ホワイトによって買収される」と通告を受けることに……。やはり経済的優位に立つ者が勝つのが、アメリカ社会の必然なのだろうか……？

弁護士の役割は？

この映画に紅一点として登場するのは女性弁護士のケート（クリスティーン・テイラー）。彼女は「グロボ・ジム」のメインバンクに雇われている不動産と税法専門の弁護士で、その銀行から「アベレージ・ジョー」への債権取立のために派遣された弁護士だ。しかし弁護士だって、依頼者や相手方の人間性について好き嫌いがあるのは当然。経営に対して傲慢であるばかりでなく、女の口説き方にも傲慢なホワイトがケートに嫌われたのは当然。「私は公私混同はしない」「依頼者とのデートはお断り！」とピシャリとホワイトのお誘いをはねつけたケートは、逆にピーターの経営姿勢や人間性に共鳴し、こちらの食事会（？）に出席したか

ら、ホワイトは頭に来てしまった。そこでホワイトがとった結論はケートをクビにすること。しかし、これは結果的にまずい選択だった。なぜなら、これによって依頼者との委任契約の関係が切れたケートはフリーとなったため、今度は弁護士としての知識を活用するのではなく、元ソフトボールの選手としての運動能力を生かして「アベレージ・ジョー」チームの一員となることに……。こんなマンガみたいな話が次々と現実に展開されるから、この映画は面白い。

ハイライトはトーナメント戦！

この映画のハイライトは、「ラスベガス・インターナショナル・ドッジボール・オープン」での「アベレージ・ジョー」チームの奮闘。本当にこんなトーナメントがあるのかどうかは知らないが、どんなチームでも予選から自由に参加でき、優勝賞金5万ドルというのが、うたい文句。したがって、そこにはいろいろなチームが参加し、さまざまな戦いが展開される。小柄ながら女性弁護士ケートの奮闘も面白いが、負け犬同然だった「アベレージ・ジョー」チームのメンバーたちもそれぞれに大奮闘！そして最後にはホワイトとピーターとの「サドンデス対決」だが、その方式も面白い。ここでピーターが採用した「戦法」は、バッテーズコーチからもらったマフラーで目隠しをするというもの。いかにも日本的(?)そして武士道的(?)な精神統一術で、これもちょっと面白い……。その結果は……？

あまり深く考えず、次々と展開されるトーナメント戦での戦いを楽しもう。この手の映画では、きっと最後には「正義が勝つ」のだから……。

番外編はゲロが出そう……？

この映画ではラストに「番外編」が流れる。これは、ジャッキー・チェン主演の映画でよくNG編をラストに流しているのと同じような趣向だが、そこに登場するのはフィットネスジムの争奪戦に敗れて、今は意気消沈し、また昔の超肥満体に戻ってしまったホワイト。そのホワイトが「敗軍の将」として見せる姿と語る言葉は……？ゲロが出そう……。これはない方がよかった……？

2005(平成17)年1月27日記